



遊方を尋一余の讒借を説ふ云々 又系後成御の御説玉侍傳の社の廟儀也後よ命よりて京都よりり 教養不し如りて法印叙せらる再冒瀆と男を兼て古書に注釋を加へ著述せし物多し

八代集抄 系系拾穂抄 伴勢 拾穂抄 百人一首拾穂抄

源氏湖月抄 枕草紙春曙抄 朗詠和歌集注 増補題林抄

土佐日記抄 右印板 每幼不共一男湖春の書之仮字美字

ともしり書とて不慮より月一又の風を紹り

○猿丸大夫 旧路回とあり何世の世の人とあり又の猿丸も明か

あみ和子のあに虚浪少くす蓋と世の浪遊者ありと又と道徳

とらぬ方う猿丸縁あ後「柳奥との紅葉の一首又絶て山荘の赴き歌とあり

附言 芝山集猿丸の旧路を紹り記あり其大まかき歌と

勢田の橋をたたく南風入くち中松下を出ては露も浴て大日らりて足

下せは供御の瀬方う又津津より田と川を流して関津と云く大石らる此大

石安の現れへ一又川み弄石多くし巧め人他のおく一夫より一ッ橋瓜渡

り極谷よむれは祠あり極谷の宮とら古本森くう此宮の後と藤花

とよ其岩控弄く一毎橋かたけく流み藤のくく激石系のとく一百合

ふい谷の粒めく名づ其谷これ曾東村とて勢田より三里余りて安めく

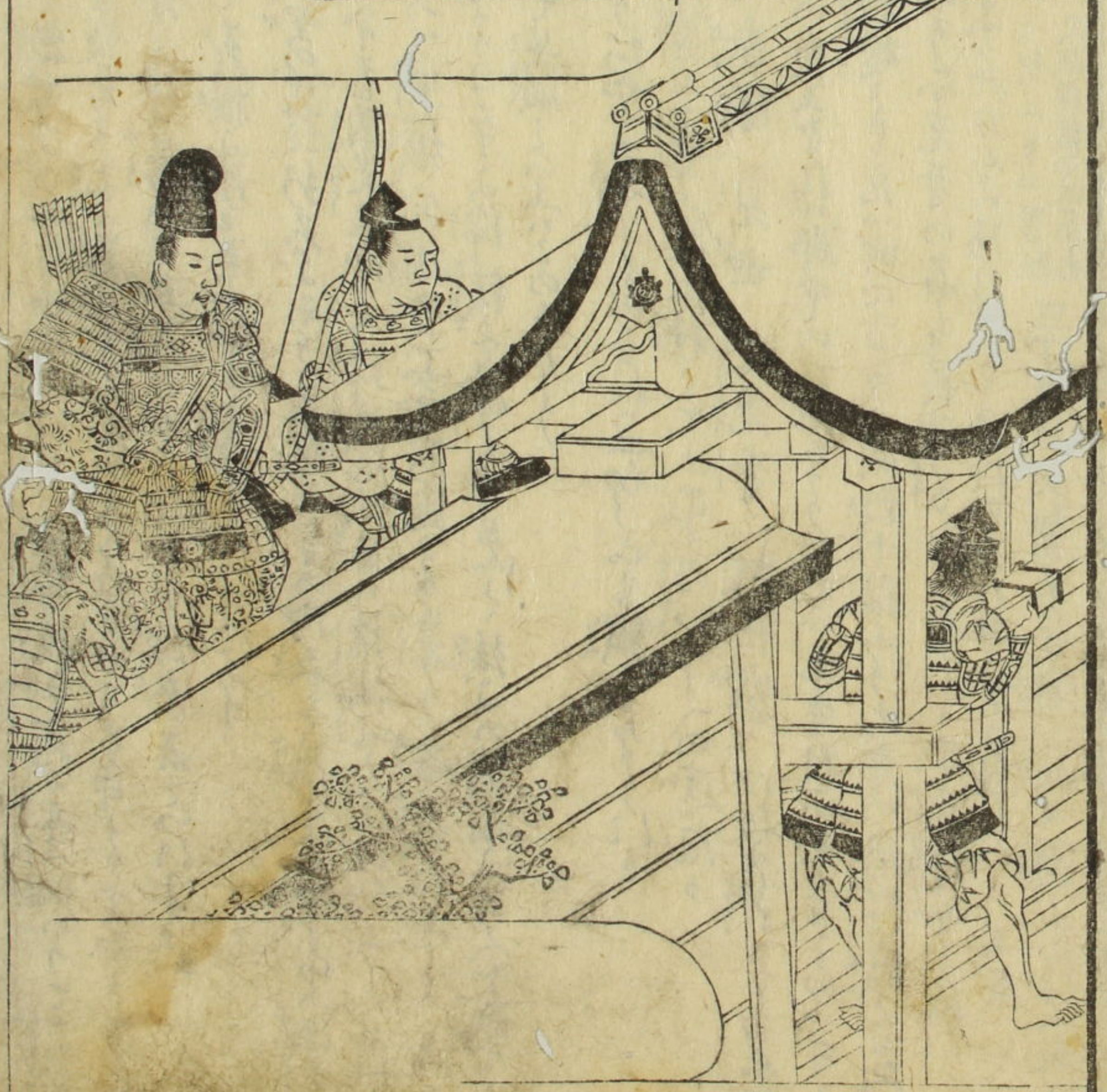
猿丸さまの旧路を村老は問ひ此二里半は猿丸の洞あり其地を猿丸の窟と名づくと猿丸の池と云ふ 昔小即其地を説く小烟雨霏々として夜を遠く山後冥沈く 毎刻とい乃中らみ榛棘を拂ひ橋をお托て奥との空に編めて揮いて起く村よりはくく思ふよかの夜の幽邃人の棲がた處よあに疑なくは其花標の示方う人備猿丸の窟と標とらなうんやと再び村老は問ひ溪のやうに岩をあり或いこれを若の柵といひ他人を森標も字流より集りて安め宿ををとりと云ふとんが是と云ひ安め此より白洲の渡を越く一里をりやん一毎橋岩屋と云ふとはつとも後わけて幸再りうら急急流は高きとてゆきまのたし遂に遠くうたがさく岸よ若くう何がまきく深淵をけは猿丸のち琵琶湖の下流の海老尾と云ふ道と云ふ岩屋と云ふれはまきく猿丸の窟と云ふ其下百歩斗大石あり突元とて高サ十歩斗の系色と云ふかへ但一空翠華の地めくこれ又く當るよは深きより村老を經て石らに山とゆりぬ此水路石より入く岩屋と云ふを結露時と云ふ抵り或は猿丸の窟と云ふべし若長明が安めを慕り田と川を

余吾湖 大ニ 伊香郡志津城の山にありて平惟茂將け辺は怪しくなり

落武者忠度  
 還馬殿五条  
 俊成御之門  
 狐川より馬と入  
 詠たれし秀秋の  
 巻物と俊成御之門  
 一巻世と討死乃  
 後千載集  
 さむ波や志賀の  
 むらさき  
 の一巻とあるまじ  
 とも勅勅のあはれ  
 こそよと人あはれと記  
 されし平家物語  
 ほどて人あはれと記  
 不之御より平家  
 物語り忠度の  
 あり



忠度の歌  
 いふせん辰本が不  
 つむせりの  
 忠人の  
 千載集の二巻を  
 ちと人あはれと記  
 されし平家物語  
 ほどて人あはれと記  
 不之御より平家  
 物語り忠度の  
 あり



余吾の軍と線せり。今昔物語云維新の義忠の嫡子之統るみ子細ありて自  
出子とあり自盛盛と先養子多く多の事ゆふまてを即より十郎とて  
ひまろ小権者と後又言ひて多君かりたれはと餘五の君といひたる  
○第六江の彦根と隣るを小江にて八巻出巻の二巻あり

▲錦織里 志賀の口村へ移るあり天智天皇の御衣を織するを志賀と云ふ  
とふ寺ありなる國光之師。錦織の地名は清國より移るなり。仁  
天皇の御始めて錦織穴織の二女皇の國より奉り雄略の初めにも  
仁女と云ふをより日本は錦織を織するを後より清國より其人を配り  
今統をさして皇族といふこのをかり

▲志賀放御 赤塚 見世 正光寺 新在家 日村より移りて志賀  
とふ志賀郡の志賀かたれ郡中の右地あり此内正光寺村正光寺といふ寺あり  
其地より移りて九一町に方斗の同敷十願あり此寺の廢せる路より  
おんあまより心光寺の名を其邊より移りて奉安洋かたれ

▲大津舊都 天智天皇の宮跡 三十九代天智天皇都と此遷り治るあり  
天武天皇の四所也 為後

所名 所名

大津宮又志賀宮とも奉る旧墟今志賀村かたれ  
の邊り大津西の山又志賀國とも云ふなり此の山に石砌の形あり法泉不修して泉  
天の石砌又其辺に志賀と云ふ今より此の山に石砌あり

天智天皇より萬葉の皇と稱し諱は天命開別天皇と云ふ奉り  
舒明帝の嫡子に皇極帝の生孫に皇太子天皇少御孫と云ふ  
謀りて藤原の入麻を誅し移りて又神代に漏刻を制し群臣の冠  
制位階を撰り大附を宮中より先礼儀と朝庭に定む又藤原と  
遷り今の人別腹の宮に後世法度律令を制し後世近江朝水碓を修りて

職を治せ種族をおて時候を改めりなると此朝も抄記  
世の推遷と云ふは法行よめて大儀の其風皇祖の神天皇舒明帝は後世の佐國に  
功を推し神代よりお比して得ざるを以て宜かり  
ありて宮城の倉の山中に造る木材を斲るなれば時の人とれと黒木  
の所所又木の丸殿と号と蓋氏の旁をいひて後世朝倉木の丸  
殿の款を修りて神樂の曲と云

百人一首杖の回のありて此の歌のいひを天皇御仁心ふくまひしゆ  
御父舒明天皇の孫國に入路ひまの山と云ふ間より民のまを修りしゆりて詠み

所名





世言の日本史より懐風藻に引多天武大友の伝を希なり天智天皇  
天皇帝之位を譲らんとせしめしを愛して僧となりて入る  
去に門く帝大友を愛して僧となりて入る  
謀叛大友と云く治ひし國は日本紀の首の難難なり此是氷泥  
滑して氷送の論は果と云く

貫之祠 小相山下の樹田に在り 是を撰之の官と云 但此地はあつた  
梅原の賢者一書ありて此の集は日皇の中のおがきく是へてその  
ことらでせりこれの源の志は松尾の撰は此の事と云ふことにて送りたるは病なり

多にいと水みやとれる月報のりるかたをそりたれ 貫之  
此の月報は石につけしはあつたなり 此辺の山中は石室其の數百五十  
計なる南の向ふはつらつらの人家をみるべし

貫之の中相言長を雄の傳又聖教と云く和名を撰せらるるを好み入りしゆら  
延法中津書不載とありて後大佐と云く此は延法中津書の紀行一書を  
其れと云く去佐月記と云く大友九年を撰し遷て率と延法中津書と奉  
りて後大友則及は内相腹生忠岑と云く去今和名集を撰せり  
之のの序を撰せり其れを撰せり

又勅を奉りて新撰和名集を撰せり此の時去佐は任と書成り系より未遑は  
帝崩し終るは是れは貫之の序を撰り此書不載の詞甚哀功之骨て  
紀行國及赴は時賢通の事は去人のよく知れはあつたり

黒王社 貫之の社の 是は貫之の志の事と号と黒王社の地と云く和名を撰と  
仁和の神々天嘗會の和名を撰と又辛禰社の時法陽の記と云く去平帝  
志は貫之の志の事と号と黒王社の地と云く和名を撰と  
て法書に入らば是れ貫之の志の事と号と黒王社の地と云く和名を撰と  
より其後大友の字を改て大伴と云く

心静石 黒石 是は貫之の志の事と号と黒王社の地と云く和名を撰と  
○あるは曰古今の序は此人の事の事と号と黒王社の地と云く和名を撰と  
と云くこれに此の事と号と黒王社の地と云く和名を撰と

志賀山中城跡 貫之の志の事と号と黒王社の地と云く和名を撰と  
志賀山中城跡 貫之の志の事と号と黒王社の地と云く和名を撰と  
志賀山中城跡 貫之の志の事と号と黒王社の地と云く和名を撰と

所名



くろぬいの中う  
 黒主 祠  
 貫之 祠



くろぬい 大友皇子より  
 連綿して長等山の地を  
 貫之 祠にておまつりあり  
 高野原の山崩しの地  
 一帯を二個人の移り  
 流すを以て方々風流  
 一帯の境なり 貫之を此  
 祠にておまつりあり





所名

人かわりをくを本の下るも... 横成光

所名 所名

穴六 此地都の後... 穴大舊都 景終天皇 成務天皇 仲哀天皇 三代皇居の地

所名

御湊... 新坊... 依之東山慈照寺... 納奉里方松院

所名

真葛原... 上坂中... 元真如堂... 十王堂... 明智寺

大禮院... 管造を... 銅尾と... 西坂中

所名

盛安寺

俗に明智寺と



滋賀院シカノ 東叡山寛永寺の御里坊にて先俗に云日光輪王寺宮の別院なり

開基は教法親王後水尾院の皇子之妻の門跡僧人なり

慈眼大師廟 慈眼大師名天海南光坊と称し俗に中原氏非記職忠の号にて

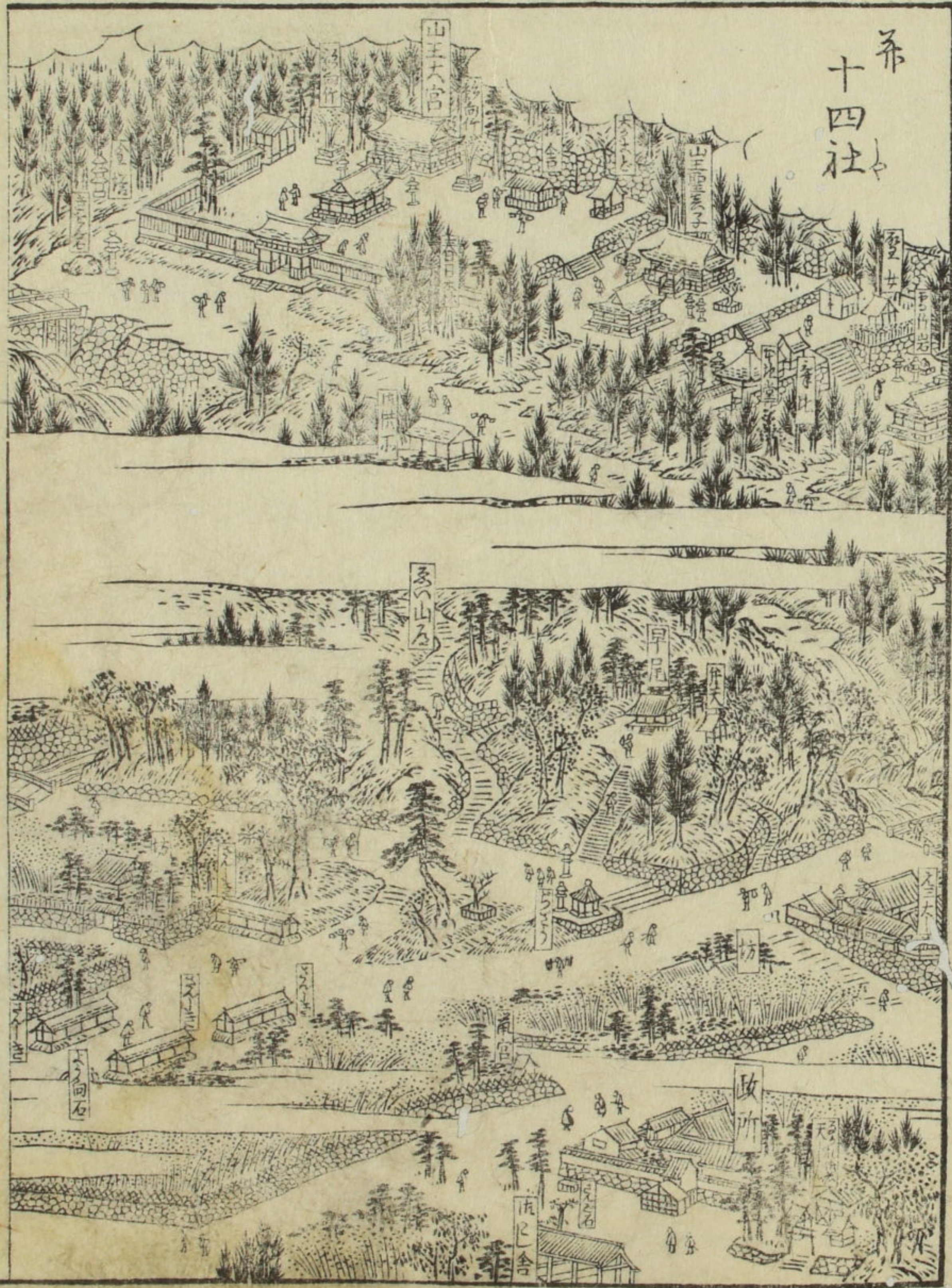
叡山中真用山之石佛あり其因干律母廟あり ○三佛堂

拂宮 西坂中の山王祭の日大津に宮より大拂と稱し此宮より

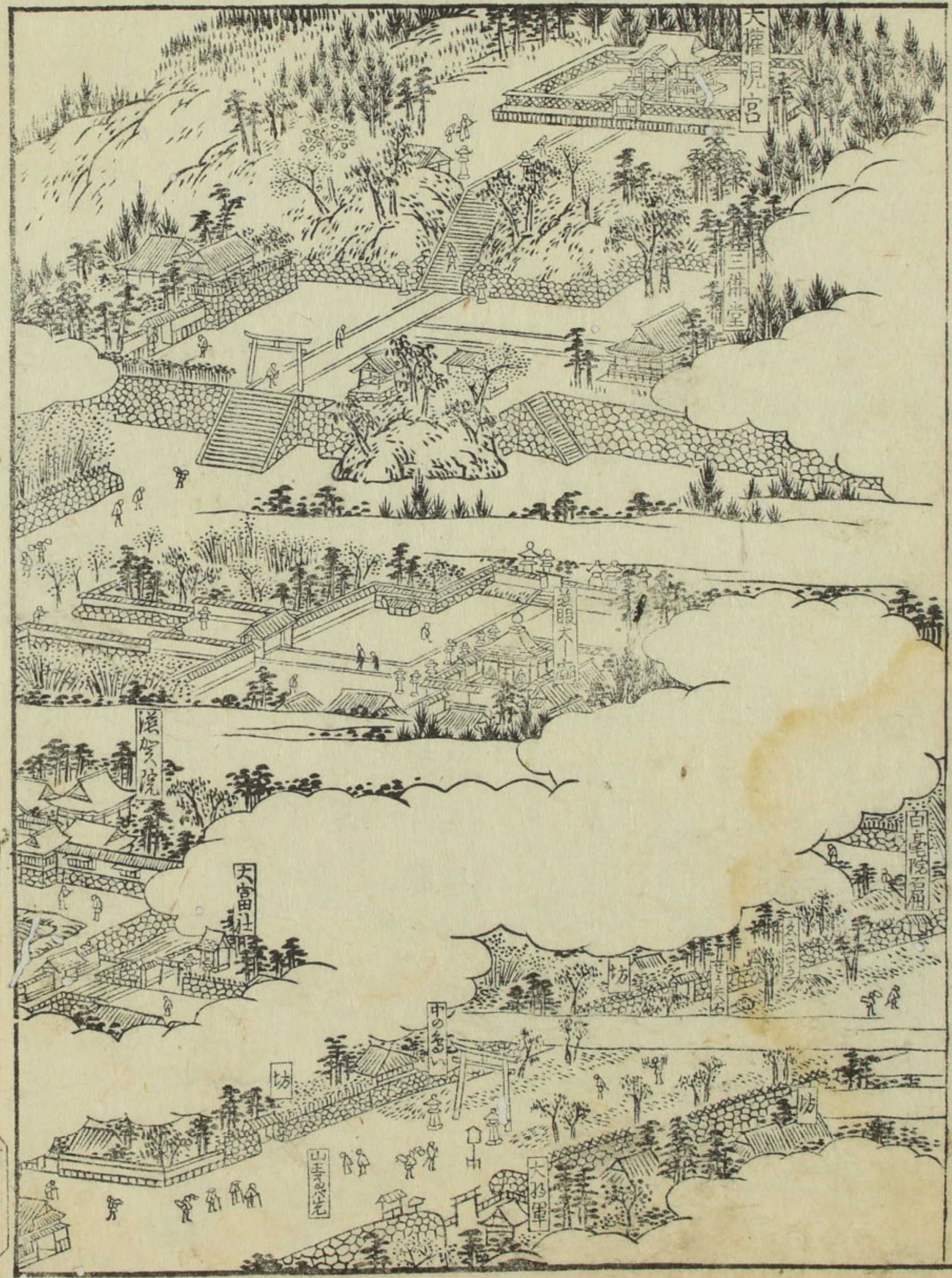
宿らせ別列の人殺すといふ

日光山王社 坂本の舊傳云天智天皇の御宇より御孫ありて桓武の延暦七年に流社建立せり後三条院迄三年始て移幸日迄久に奉遷りて神宮の官幣位をまらせり後毎年日月祭中申の日より其後長山門破郊の村に社ありて天正七年元の節に建たれり又神輿を振て天子に敷許す其の流河原長治二年大内裏侍門に振りて其後意安永の流に九十度より神輿を振りて其後意安永の流に盛出くさつばいやせと云俗言も其遠風なり

○旧記曰高木りて勅さるりの山之三叉は經緯とるりの王は是より門く



其二  
源賀院



山王さんおうと云 〇日吉のひよりとよむいほり之を治すは日吉と云 〇日吉のひよりとよむいほり之を治すは日吉と云

後三条院日吉の社より移りて小倉に遷す 〇日吉のひよりとよむいほり之を治すは日吉と云

八王子の皇子を引率して天降あり 〇日吉のひよりとよむいほり之を治すは日吉と云

三宮 唐女形 垂臥 恒根尊 一説 天照之孫の三女 本地番賢

菩薩 旧記云三女親向の末三宮と云 八王子の皇子を引率して天降あり

七社 〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

宿大菩薩と云 此國の地主 〇電殿 〇猿舎 〇猿舎 〇猿舎

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

〇大宮 大比叡大 俗称老翁神 垂臥大己貴命 本地親伽如來法号を去

○客人宮 唐女形 垂跡修持冊尊 本地十一面觀音 一説曰白山

妙理権現 桓武天皇即位延暦元年八王子の権藤又天降と。旧記云

文德帝天安二年六月十八日迁宮 聖人の云々より八王子七社所攝 此宮の終ハ牡丹輪捧

○雪竹の岩 宮の傍

○十禪師 若僧形 童子形 垂跡續々持尊 本地地持善菩薩

。旧記云十者天七地二の教之師の國之禪のゆづり十善天子國と懐

るの者人 桓武天皇延暦二年正月十六日親白 三月廿四日廿五日親白持講あり 神輿の級と兼かり

乙上七社

大宮 後後撰 古の勢乃も年以りる者の身ゆひをよとる者けりし風 後系極

二宮 新古今 やとらるる教を権藤より墨のきりし光りしと云ふ 慈因

聖堂子 後後撰 居りしる光りる屋をそあじりし西の雲丹秋の夜乃月 僧都 良仙

客神 全 今 入りし光りるをけりしやとらるるの白根や書けりし聖 後系極

十禪師 後後撰 本のかれ海雲峯照りし光りるをけりしと云ふるの月 後系極

掲属十四社

○下八王子 垂跡天御中尊 本地虚空蔵 本地石取と云ふ石あり 乞路延

の地へ。尚社又神馬あり 信及法坊都より 延座

○王子宮 十禪師神殿の傍に在 垂跡建御名方神 本地文殊。旧記云

早尾 垂跡素盞烏尊 一説後田彦 本地石勒。旧記曰馬場原上

法座諸人加護深重の神なる故に口よこれををり。傍に安天の社あり

○大紗目 垂跡高皇產靈尊 本地毘沙門天

○聖女 下照姫ををり 本地如之論觀音。延喜年中造立聖堂子乃

右の方あり 俗に聖堂子の母なりと云ふ 新約集 瀧津姫ををり 本地吉祥天女。旧記曰天照神素盞烏の神を

盟いし生木の三女の一也 山末 本地摩利支天 垂跡未詳

○牛尊 八王子の社あり 本地大威徳。傳曰牽牛星伝はる

我云牛堂子 牛堂子の大寒の日持来理の口門に此像をてて夜をそとらるる

云来根源よりあり。傍に百々まるとりのををり其ををりて 小禪師 垂跡度々出見尊 本地弥勒龍樹



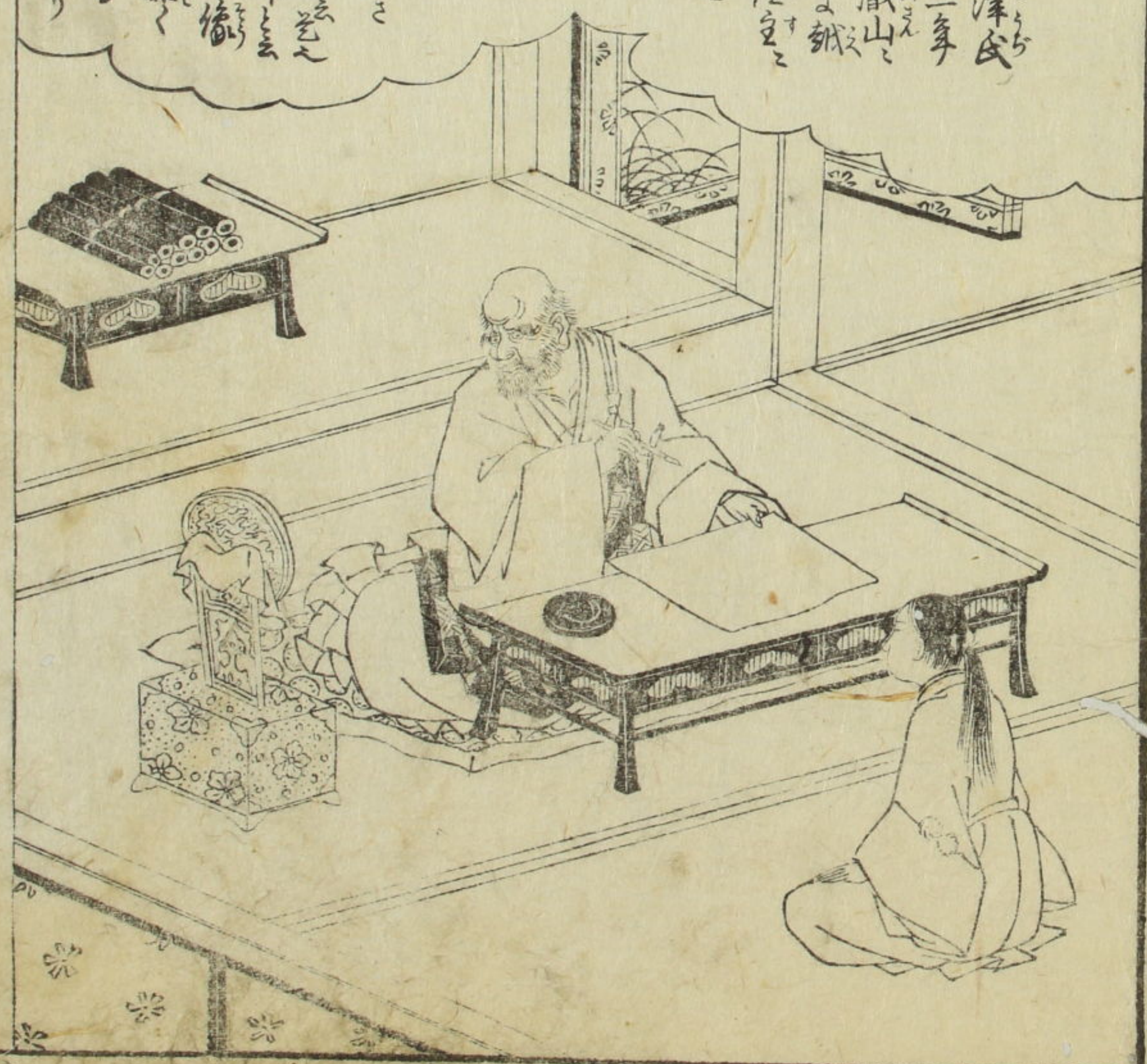


○惡王子 皇子は出立てて本地愛深明王深秘ありと云  
 ○岩瀧 縮輔姫命 本地布衣天 ○旧記云竹生傳の神の月鏡 又神武  
 天皇の御子もつひ傳ふ  
 ○細宮 素盞鳥の愛神 本地不動 ○旧記云素盞鳥出立之殿山の凶の退教神  
 仲哀帝をおる 本地聖観音  
 ○瓦比 聖皇子本地事のむひみあり  
 旧記云誠宗南麻分親向。桓武の御宇勅法  
 ○大宮 大宮の右あり 海津彦命 本地金剛界大日 ○旧記云大蔵の  
 神の子に諸家宮の守神

○末社 和同四比叡にあり。國幣三の本地金剛界大日  
 ○若宮殿 聖三社の宮殿に對してこれを聖宮宮殿と云  
 ○女別当社 神子孫あり不  
 ○熱社明神 總合のち井のかさつみ  
 あり安子まのお殿あり  
 ○白鹿倉 旧記曰此神十二月中子とて燈と  
 山門をさうと後の飛石のありハるの宮と  
 かつて比叡ふのり佛光の燈をを燭破りたるるを防ぐは御方にて  
 飛臺と社の神と當りて其甚多公まつりたりとつ前のお倉とんと云  
 ○尾地宮 傍あり  
 ○氏長者 此社  
 ○戒宮 天律の  
 ○籠河茶 八王寺の三の宮の内  
 ありこれ織女と云  
 ○夜掛石 此  
 ○地蔵寺 早尾に此下六角の寺  
 竹教大師の傳ありと云  
 ○佛院 傳教大師

元三大師

元亨尺書曰良源姓日本津成  
 をは國造孫那の人の延治十二年  
 九月三日生じ十二歳に叡山  
 に入り聖山と師とんがまふと紙  
 たり康保三年八月天台の座主  
 補せらる此時寺舎被壞と  
 天元三年僧正とぬ永親三  
 年正月三日寂と年七十七  
 良源石刀の白さうも  
 擲さるるれ不自ら足成  
 て我を教とほせり依之云  
 我像と云不必ず邪魅と除  
 違ふと云世は元三大師のれ  
 此像は二種あり一つは角大降  
 雲の形一ツは若の太師の像  
 のそ乃れ成てしうて皇の如く  
 成りの世三師と一統と云り  
 自の之を後と皇大師と云り

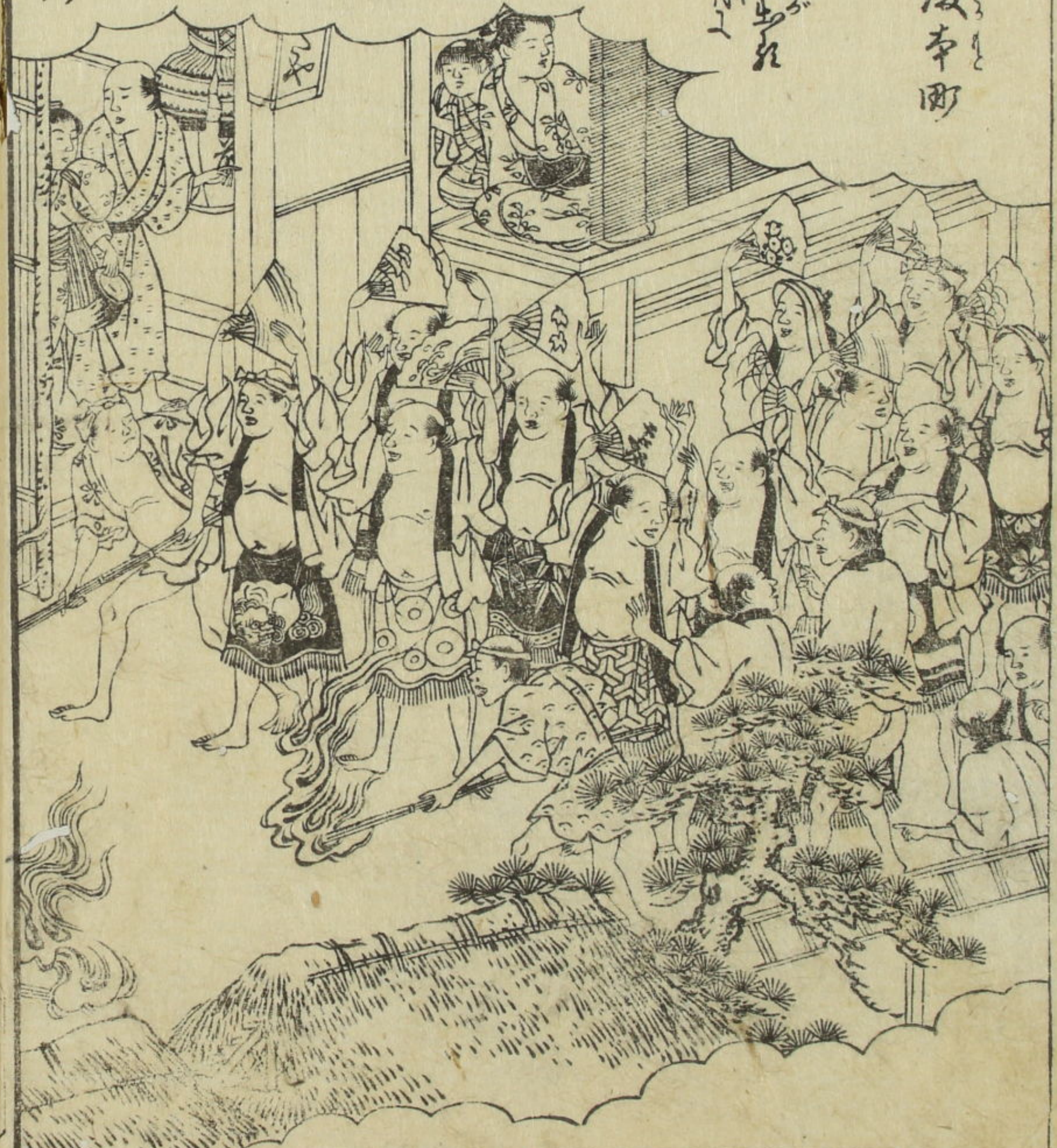






山王祭礼坂本町の  
駕輿丁

南坂本町より出れ  
若申の日の赤青  
いんぢあつれ  
松明と照  
エイ、ラウの  
敵をさうへ  
村中及び法橋  
を鳴るを巡る  
姿いゆた纏は  
とさく撲鼻  
又燈地巻紙  
そせるは氣力  
よ代入  
ゆかり上坂本  
下坂本乃



いんぢあつれ三日  
より神楽を  
管とあま  
甲冑とさう  
着子の母衣  
よいあひの  
付物を  
つぎ  
かざし



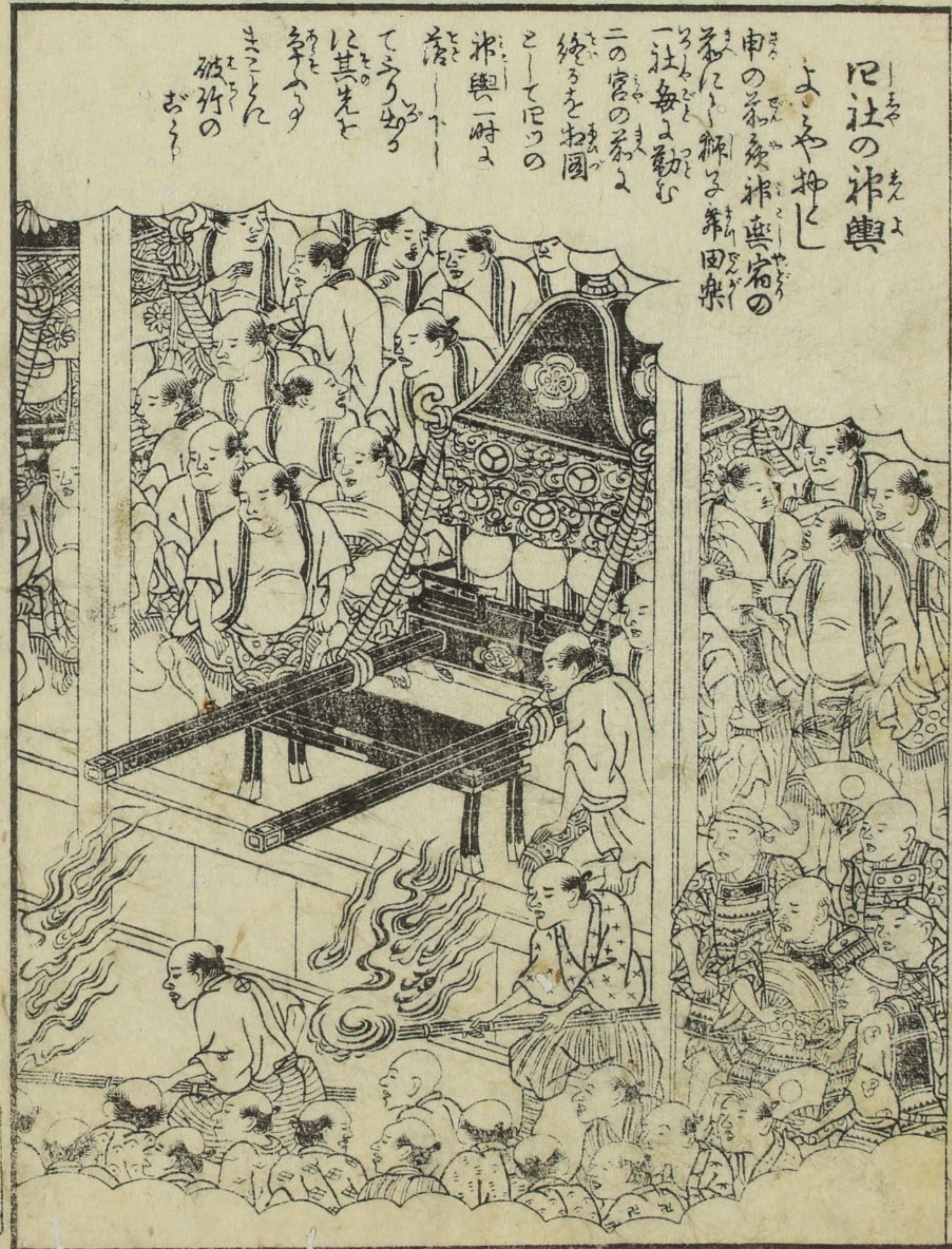
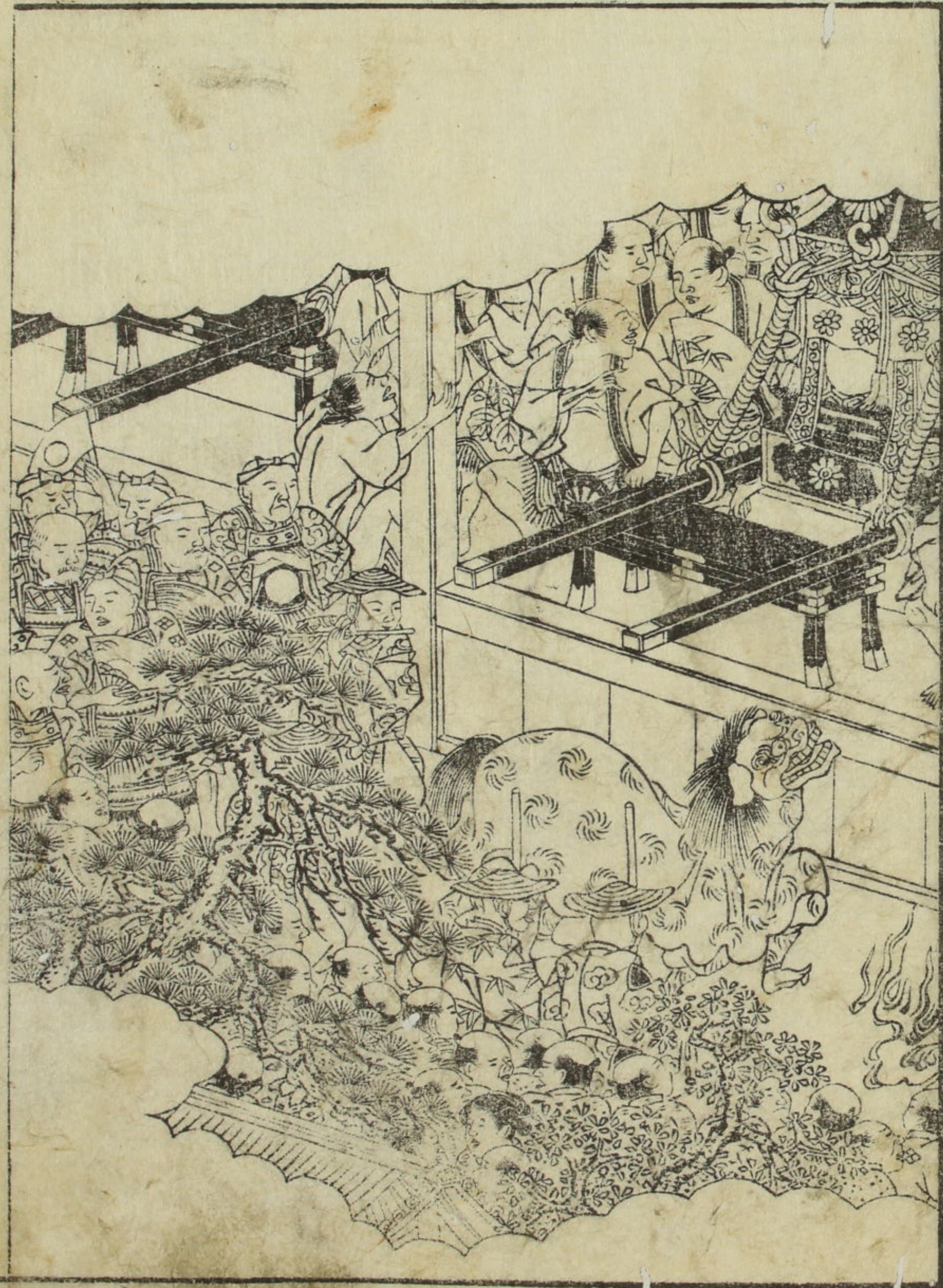
院天仁二年四月廿二日勅して十禪師の神輿を造らむ  
又三宮の神輿を造らむ六十代圓融院天元二年卯神夏富津漢より奉り  
の浦より龍形龍首の形を造り人二十余輩奉樂を奏と七十一代後三  
條院延久二年四月廿三日より官幣役を造らむ八十代明徳院建曆三年十  
月十八日祭礼の日勅使左近衛權中納言源平朝臣兼左近衛右衛門  
總持として今より御祭礼の始より後光嚴院延文年中洪水已後の例あり  
然るに元龜の兵火よりして祭礼も久しくさへ事終り天仁の聖朝よりして神  
殿祭礼も御再興ありて今又連綿より其祭礼は正月より三月終りまで  
みもを今より造らむ作りて神祿の人の後と

正月十八日大政所各々の後みもを造らむ七社半五二通并擡十二枚りてこれを  
二宮十禪師而社宮仕の内三禰各番又相違とす又祭礼の儀式三禰の勅あり  
○三月二の申の日辰刻八寺三宮兩社の神輿各儀より中社拜殿へ入りてまつる  
○三月廿八日の山門より入らむ大社の立本のありてこれを造らむ  
飯室廣る芝松より出りて正月晦日早且廣道に捨て神酒を体へ奉るの宮  
仕祝言と此附七社の宮仕は手を排りて並居て神酒を頂戴と排り人夫十人  
むらり排を指各供奉し一毎大宮の東の方へ入りて又七社の神祿小社とも  
各排を造らむ○四月朔日祭礼の始として七社の宮仕御所へ奉會と○四月三日酉  
刻

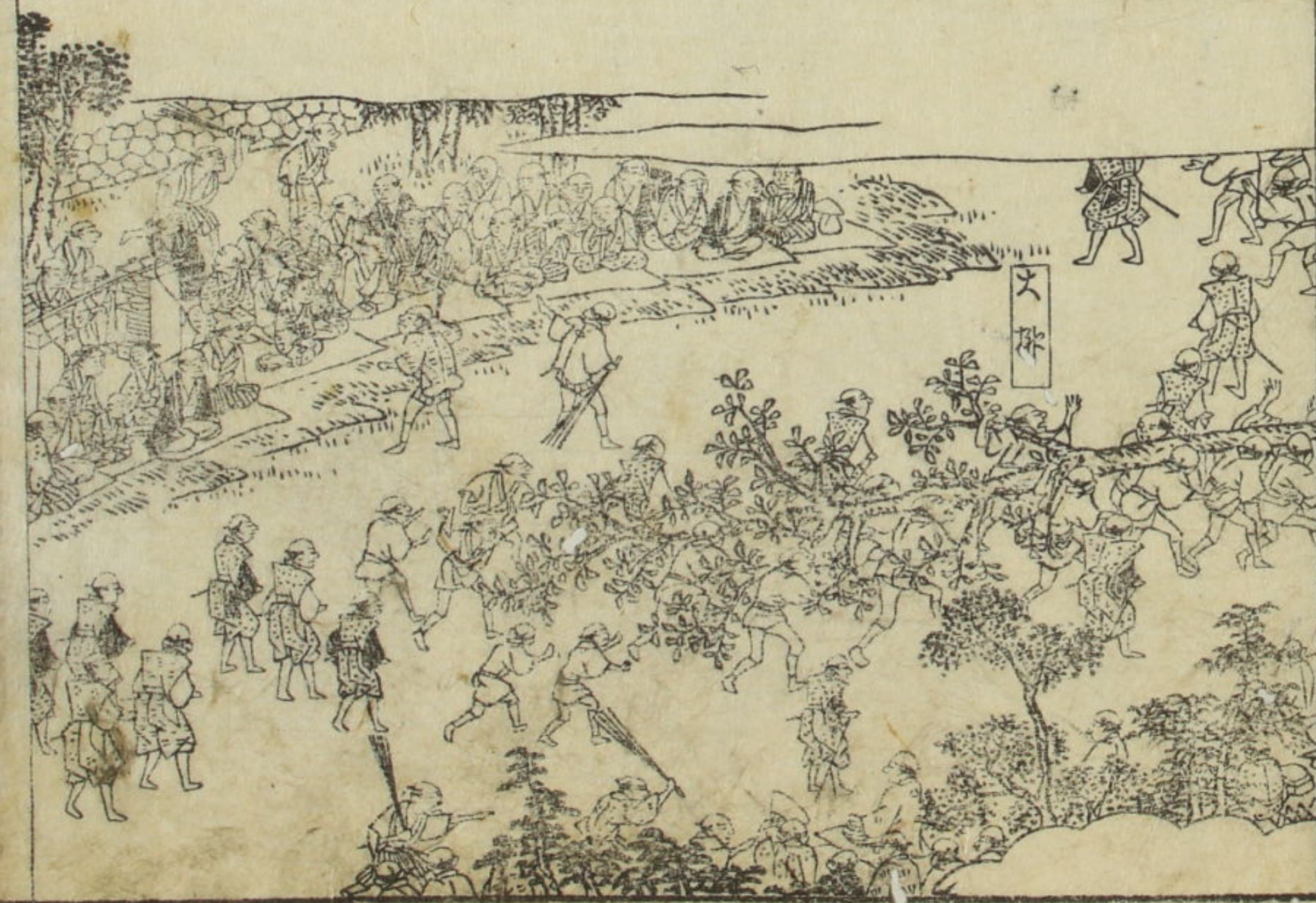
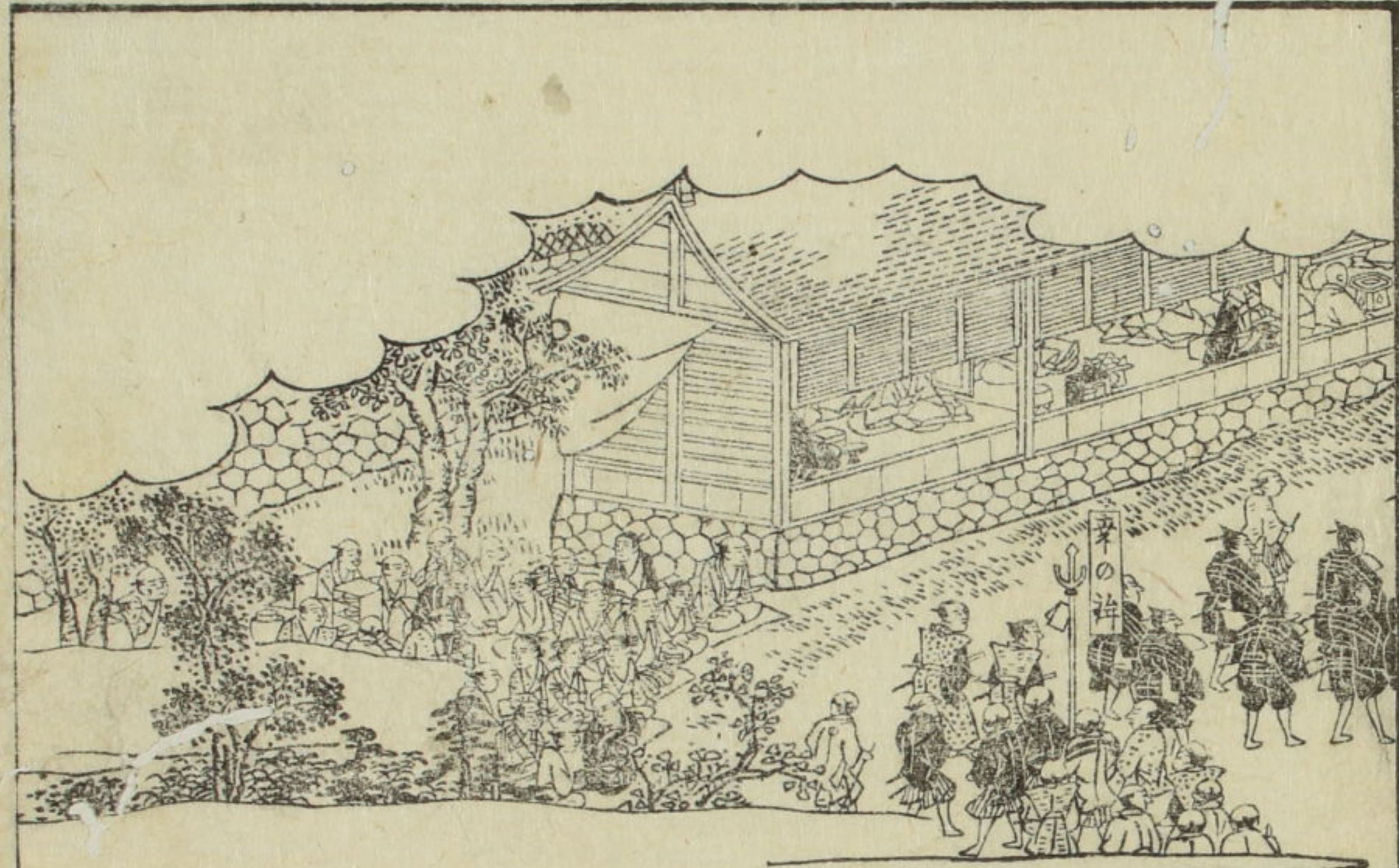
大宮中殿より抄ひく神酒を二社又供へ排調進の宮仕祝言して皆大宮中殿  
又祭候と今日神酒樽足打二膳去差共大宮并和布十把執事代より排調進  
の宮仕はまつり下りるは神供の用なり○日刻大津に宮より大排御迎ひしり  
親近松中明神の神人お源各布衣袴馬を乗り樓門の外より馬して大宮乃  
拜殿正面より急座と宮神の宮仕大宮の階より入り御むひの人又勅杯三度と  
て人夫等松明をてらして排を捧持して大宮の後をまゐる西の方より社の正面  
日陰の内より幸の幹も日く入之社家階をりて膝打の下は祝言して退む  
是より幸幹より早尾大物中の画像をうけく先より大松明をさし樓門より  
排は出りなると大津に宮へ渡りあつ踏次の家毎に燈をさし○四月祭礼の  
西の日より慶喜の宮へ一通を献とそれら慶喜の宮より奏願の通の由の侍  
へきさる奏願を経て女房奉書紙履宣を授けり執事代へ勅許おとす  
の御役者より四月五日の山門より諸方祭礼の役人粟津御供中御座祝言  
與丁より下知の一通を送る○次は西の日大政所のまゝを各御神祿を  
○四月廿日祭礼の午の日神八王寺祭礼これ午の神祿より先八王寺三の宮の  
神輿を兩宮より昇出を難和の坂をりて二宮拜殿へ渡りあつ祝言人此  
より抄ひく燈をぬきりて中社祭候とて入りて社を捧りて  
居る一老南より奉幣おとす退く此日又該の五社の神祿奉儀と

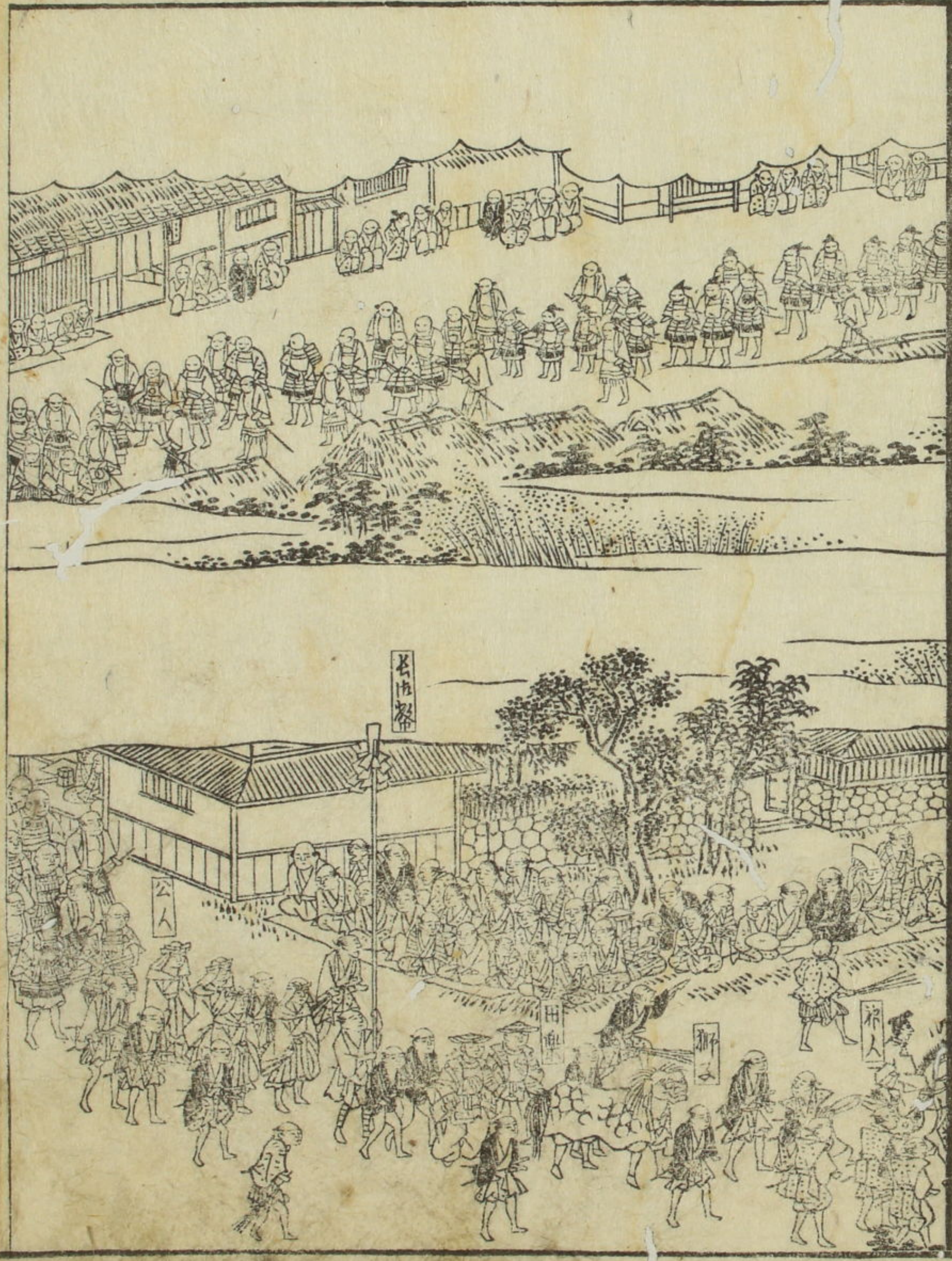
知と又大政所の神祇を名とても舟より精進竹二本を立於不七所あり唐  
倭も舟の政行舟西○下坂本兩社の過○比叡過着宮の義○大舟舟の路○政所  
○馬場收納所の過○二宮橋の舟等○つづも上方の舟の路○又幸精進竹乃  
心又竹七本づ南心七通合くは十九本までは連を曳く是は右宿院の路を神  
輿を移りきり不と古老是とつりこれ下坂本大間町大工中宿院前在り  
大津津出町大工源左の素漢を名て言是をこれ名を立る○未の日五社の神輿  
の御装束はけはる此内大宮を名る客人の神輿は由大宮の拜殿へ移り是る  
二の宮方二宮十禪寺を飯屋より出り神輿を立名にりはなりて派と八階  
小掛る然して小比叡の拾宜系候して移りて祝言と小比叡の拾宜とハ拾宜  
の正光○未の刻二宮政所の拜殿へ遷幸ある八王子三の宮を加へては社方り  
上右の舟の舟はゆひ一はまを舟の舟よりつりて二の宮の舟は今更の刻舟  
みより今日申の刻に節敬言園大宮方政所方者三十人斗皆用舟と着  
して而石の神輿の舟に渡る素緒を名一五條架裳をうけて去くと佩く是  
幻山院の内渡正院摺正坊合輪院南岸院日節の内二人が各番は勤むく  
て一人が而石神輿の舟に下部も二人兵具はくお後二の宮も日く政所乃  
儀は益長くこよひの祭礼おとて候但し今日に節敬人法とむと○日刻  
敬言園渡り終りて社家王子の儀は参候は社の宮仕神輿の舟は候を社家

下部と名て都同と云次二宮方の宮仕を立て後人奉れと二宮の神祇を  
奉りて奠茶と大宮の本守を召て本社一神茶瓜奠とんが社家一宮は舟を  
以て祝言一畢て退く次小比叡の拾宜日く去く退く此後衣冠の拾宜一  
人王子の外陣は名座とありておとて茶の中○酉刻は抵園社の宮仕未の御供を大  
政所持奉と三の宮の棚み拂を仕り御膳皆これ裁と其後二宮○洗米  
別薄濃鏡一巻紙一紅筆一造雛舟一造雛舟一造雛舟一造雛舟一造雛舟一造雛舟  
御幣 御杖 八王子。洗米 十禪師。洗米 神酒。三宮。洗米。右宮仕清  
きて神輿は供して又くはれはれ各拜して退く。札板は三尺斗はして神の袋  
よ入て幣は拾宜は但し札板は抵園持入る  
日吉 未日右方舟人 兼和元年正月 月日  
未の神供調進の石鳥丸は糸掛門上町ふと町ふと一貞堂かたケ年 ○日刻大宮の宿殿を  
記名しては不より調進せし今日ハ抵園の幸田候とつり ○洗米。去。和布掛  
岡と抵園より神供を名る棚のうざり名は日く。洗米。去。和布掛  
○舟菓子飯は名義解。掃高。神酒。御幣。次又五の上刻敬言園の云人  
皆禮を名一松明をもち申の舟舟の下は神奉りて二の宮は五の舟は源寺  
の禮をつく三度舟と所八条町庄の所一度は三方より集り小坂中の後若  
左右瓜圓る十六谷の云人を名る一獅の役人馬場の間節瓜吹て去被るは  
次は田樂法師は敬言園の云人皆名を捧持て殿をあげて政所は集り  
公人禮を付け名る一社の神輿は二人の輿の先服をもちこれを駕輿丁乃表









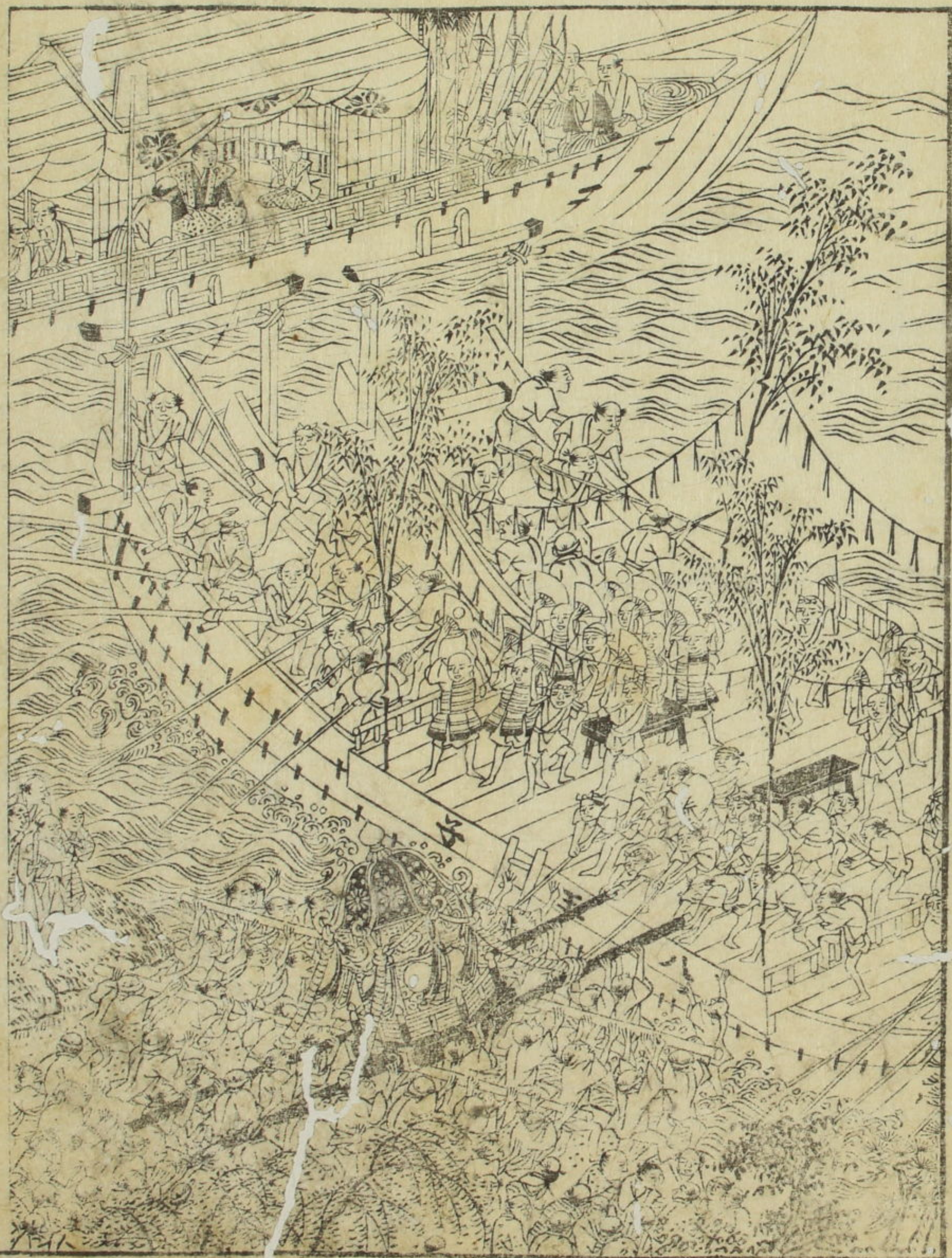
張るゝふりゝ毎神輿の事、師、舞、回、樂、社、の、興、每、決、定、二、宮、ま、う、い、  
納、り、お、あ、ま、ら、し、て、公、人、勝、勝、く、日、社、の、駕、輿、丁、揃、ふ、う、と、呼、り、あ、り、勝、勝、  
こ、こ、其、府、神、輿、を、一、時、は、殿、上、り、下、し、て、か、さ、し、各、遊、藝、を、し、り、お、隙、乃、  
遷、移、を、し、り、そ、い、嵐、の、禿、倉、う、り、式、法、の、列、を、定、め、二、宮、格、付、ま、り、夜、宮、乃、と、  
より、地、社、の、糸、を、経、て、惣、合、の、を、舟、より、大、宮、の、拜、殿、入、り、是、を、号、す、七、社、の、  
神、輿、一、不、に、列、立、と、政、不、の、日、節、は、後、殿、し、て、惣、合、の、を、舟、の、下、は、ゆ、ひ、く、挑、灯、も、く、  
指、さ、る、付、大、宮、方、の、日、節、も、一、度、は、を、あ、る、○、次、は、日、社、の、宝、殿、の、内、陣、は、神、供、あ、  
客、人、の、社、の、下、殿、み、こ、れ、を、供、え、は、是、を、あ、る、二、度、の、其、一、ツ、也、○、二、の、申、の、日、節、下、坂、中、  
町、の、淡、ま、ゆ、ひ、く、七、社、の、神、輿、の、方、に、お、か、を、揃、ひ、舟、五、艘、を、よ、せ、合、せ、船、深、と、ら、  
り、く、其、上、に、板、を、ま、り、板、の、よ、く、音、揚、進、作、に、本、を、ま、り、七、本、柳、の、方、に、舟、船、  
と、ら、る、○、神、馬、の、船、八、艘、同、く、此、淡、ま、ゆ、ひ、く、是、浦、く、の、後、○、日、申、の、日、の、大、  
宮、控、見、の、お、れ、か、り、又、知、神、供、神、宝、等、と、傳、入、退、く、三、院、殿、後、未、清、禪、  
笑、法、施、神、樂、あ、り、此、日、午、刻、斗、は、山、門、の、衆、徒、三、塔、各、集、衆、一、お、集、り、て、  
接、衆、入、の、知、あ、り、各、の、公、人、は、酒、を、取、な、ま、ふ、公、人、を、お、り、ち、刀、と、持、座、こ、ま、  
通、て、飲、み、三、款、先、冷、酒、也、る、又、一、遍、ゆ、て、次、は、者、者、深、の、小、串、を、ひ、く、次、は、酒、二、  
る、ん、○、は、約、一、公、人、は、糸、並、ま、せ、衆、徒、馬、場、より、出、は、各、格、段、は、入、る、其、間、公、人、糸、  
は、言、圖、と、接、衆、ま、る、簾、と、ま、り、各、に、食、度、あ、り、約、衆、先、飯、酒、肴、等、こ、れ、を、

設、く、見、の、格、段、入、り、に、公、人、糸、並、と、次、み、小、串、を、一、人、肩、を、は、り、長、袴、袴、と、思、  
一、神、扇、紙、り、ら、法師、の、肩、み、の、法師、白、布、一、端、肩、より、ゆ、て、の、せ、り、次、は、若、大、  
衆、徒、法、衣、を、一、老、僧、日、く、後、入、見、上、座、に、坐、り、て、三、院、互、に、酒、授、祝、言、こ、れ、  
あ、り、其、後、食、度、見、見、の、り、より、お、れ、を、没、く、○、未、の、刻、は、衆、徒、神、供、船、を、お、り、は、  
山、門、約、約、代、二、通、格、段、持、き、さ、る、○、日、刻、座、主、の、言、より、幣、役、大、宮、一、お、り、此、色、の、  
泡、囊、五、條、裝、束、す、て、神、幣、七、本、之、於、眞、り、て、先、を、お、待、り、日、刻、社、家、二、人、衣、冠、掛、  
寺、自、分、の、宅、より、衆、徒、は、政、所、の、糸、を、通、り、馬、場、ま、り、出、て、大、宮、に、糸、候、と、い、は、  
の、幣、七、本、宝、糸、に、ま、り、社、家、の、り、出、仕、座、主、の、幣、七、社、の、神、輿、と、祝、言、終、  
て、ま、る、大、衆、の、の、り、坐、と、○、座、主、宮、の、幣、役、大、宮、の、階、を、三、段、上、り、付、宮、位、柱、の、  
枝、一、把、を、取、り、退、て、其、日、上、京、あ、り、と、か、ん、○、大、宮、御、宝、糸、は、神、馬、一、疋、と、奉、奉、て、  
神、輿、と、各、柱、の、板、を、取、る、○、大、津、に、宮、に、こ、れ、あ、り、大、津、年、の、刻、斗、は、上、坂、本、柳、乃、  
宮、に、渡、御、あ、り、こ、れ、に、宮、松、本、平、神、明、神、樂、津、入、不、社、の、神、人、等、供、奉、し、ま、  
る、若、後、き、び、く、教、言、圖、の、を、祝、言、寺、町、み、あ、り、て、神、柳、を、留、り、着、座、し、て、  
其、布、の、瓶、浴、湯、を、ま、り、を、お、り、奉、奉、の、神、と、と、一、懸、を、お、り、こ、れ、を、浴、し、畢、つ、く、  
坂、下、ま、り、○、未、刻、宮、は、三、人、柳、の、宮、に、糸、を、あ、り、向、し、此、内、客、人、の、社、の、宮、位、を、人、  
奉、幣、祝、言、と、其、余、七、社、の、宮、位、の、内、二、人、の、お、つ、く、神、を、大、宮、人、供、奉、と、○、未、  
の、下、刻、教、言、圖、の、公、人、下、坂、本、柳、尾、上、の、領、者、を、ま、り、中、の、を、舟、の、下、は、





七有柳海岸しちゆうりゅうかいがん  
 七社の神輿しちしゃのしんぐり  
 沖又漕出おきまたうしだ  
 白しろ



其二

附六十三

如との急めて先沖の方へこれあり唐修の旧式町屋に御社を置けり  
七社名ありり尚る名の列り中央大宮。左二宮。右聖賢子二宮の八王子と  
聖賢子の南宮人の八王子の三宮の南十禅師其次は御社名東向  
ありあり各御酒代供し奉幣祝文ある粟津の御供し日向之粟津の  
御供し大宮の御供し東の方町斗降て尚る御幣と小松  
の漕中へに板ありり大宮の本守これを受けて客人の言よりこと  
官はこれを五く社家より此社家より奉幣祝文と次は御供  
私より素緒又二條を着し一僧御松といひし御幣代と次は御供  
海へ為とせり十九層御葉子御酒代此御供の御中に御供し  
音樂あり又御供船屋形のうみ後の形の奉子七人布く遊戯をると  
此御官は小松より唐修南の漢より御馬といひし還御し御の祝  
言奉幣と御馬の別尚御幣七本を持きて次はこれをいひし  
御馬といひし御幣といひし此幣をて社家賽し此幣は御供船の  
くさし幣を皆海中へ投入し種をおては御供をとりし其御又御松  
被をより出りて還御先進次第ありて比敷辻着宮の御は着奉る御松  
還御し御の御の御を指箇わりの御斗斗東へ大宮二宮先きに

着奉りし次第は三宮を後殿といひ八條様大徳の家へ唐修にてを  
て此御の駕輿丁に比敷辻村に二社と八條の下迦羅陀山地蔵をりて  
の御奉る是より谷々の云人三院の谷其社の後者希院の奴僕與て各本  
社の御入奉る。御日己刻社家各社へ御拍子をとりて御歌を  
うといひ賽し各御與在嚴の具もををりし

賽のり百三十五年南へ廊の御子大宮より御の物あり  
郭云深と名有り出たり外に此と名ををりし 三五

西社明神 東坂本並本松の傍あり此五月初三日

七本柳 東坂本の柳七本生ひりや号く七社の御與系此の漢あり

坂本城趾 下坂本松林の漢一兩年は城と 信長云巖山を焼くより此石城と名

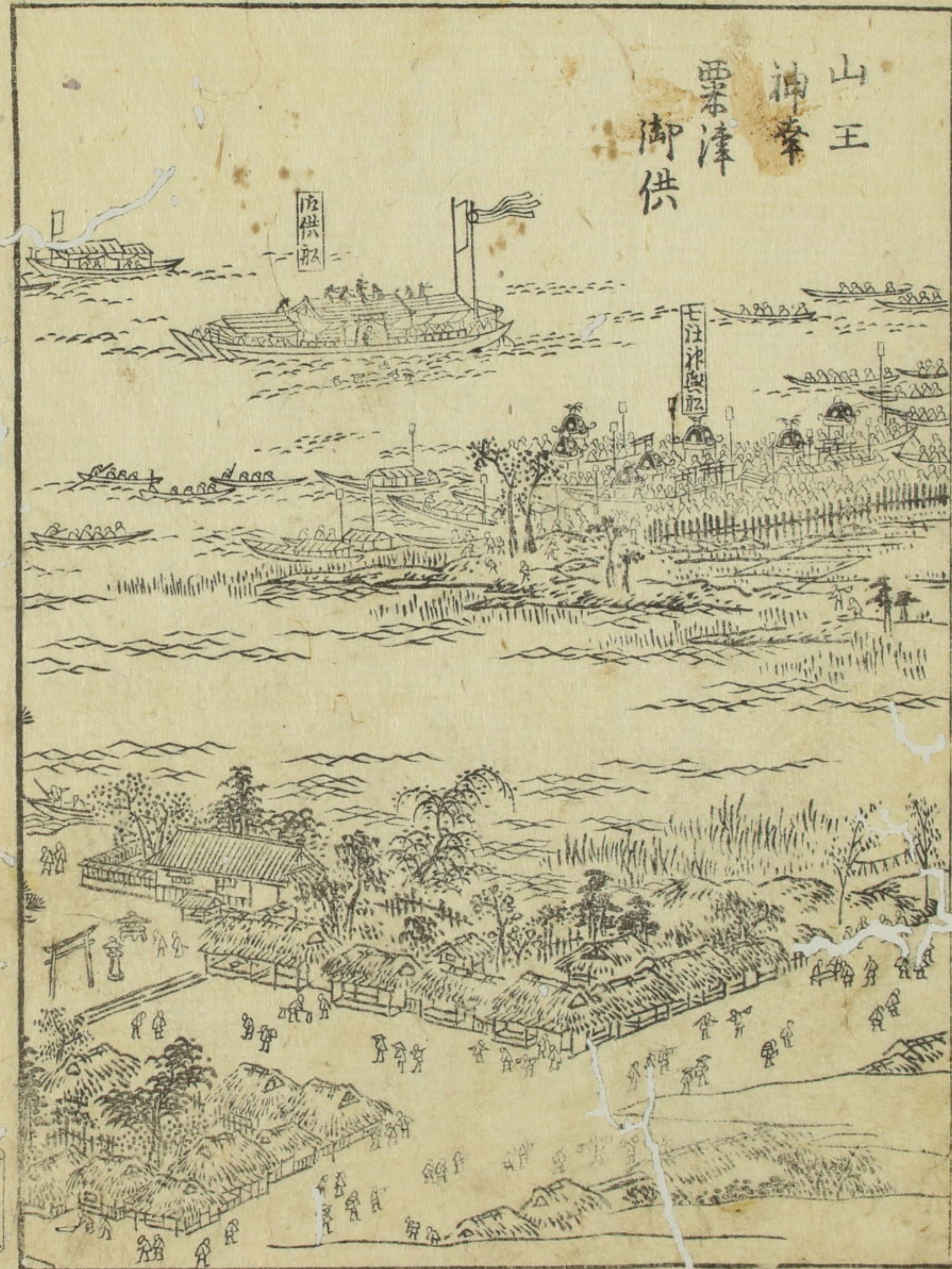
明智日向守といひ其後天正十年光秀信長を殺し日向馬  
女をて安去の城ををりし秀吉中國より馳のり明智といひ秀吉  
明智利ありり勝隆寺の城へ入り此御在馬女安去ありて軍率を  
集めりりみ遂に戦死とて日向守が御を御の城へ入り御籠る

唐  
嵩  
明  
神  
系  
孤  
松



一ツ松

山  
王  
神  
索  
栗  
津  
御  
供



御供

七江津

附七十五







須明寺  
 月  
 浮  
 入  
 堂



堅田満月堂  
 六帖  
 若狭街

政村

加  
 此  
 乃  
 志  
 乃

○

見録のつらとよまらるる十二月廿日特なり  
 唐奇孤松 第一葉なりとつり予これとらるる  
 此の松もあつり今 第一葉なりとつり予これとらるる  
 方み番より古奇教あり一葉なるみ違わらば  
 我もても背の遠くちりなりこりに老本の唐さたの松

唐勝の松も廟のうらちうく漕船の松も松  
 かうさたは松も花よりゆは海より海

附言 尊朝親王 嘉運院 長三年二月十三日  
 廟の幸せとせまりこれと退隠及び精舎佛圖の松も廟のうらちうく

備づついのなにかつらに理とせり 踏まらたよりなりをのり  
 此の松もあつり今 第一葉なりとつり予これとらるる  
 方み番より古奇教あり一葉なるみ違わらば  
 我もても背の遠くちりなりこりに老本の唐さたの松

附言

壺状として文武学よとと又考をのづり 壺状なりあり  
 の河城郭をあげけつりこれと其をうらう 松菴東玉 雑毎直考  
 の雅緻いゝ裁たるやとと家中のものみつひ多風情あり松を  
 まふも考にくくこれに性来の人もつりめぬることもとく  
 千耐天正十九年卯年秋の末人もぬるこりかいつり  
 とが中みよらば

地のづらふとせむらへかうさたの松もひりつり  
 と度ゆて松も中もさくまはつり 梢今一はれ  
 松の素性を大むひとせむらへ大津の宮天智天皇  
 みらどいませうと大津の都繁花斜ちり 今今の三井寺  
 の御門の勅願所として法水の流と三會の曉まで  
 掲げたりあつり天皇がく松も幸はるまは沖中より漁船  
 あり 名あり非松 沖門詔さまぐめ 柳も非松奇特あり

かくうしん  
 大友の三門の溪邊をうちきしりせらる波の勢あまきなり  
 とを船つらつちあきんもくはる神池あり山王の神神とて中・皇霜  
 たりりてらとせらあまきり今も祭礼あがり勝はく粟飯の神供など  
 備ふるもそのりりれことありとぞつひていさまぐのりあれとらうし  
 たるけり今此神代も大津いもあきくぬりて昔の都も神よぶ  
 まどく那のありに政るさして民のかまはれ煙も物さくきこのま  
 うじとあきひささひよこはれはれも下の上のあきくぬりて  
 をさやうちる神代よ生れあきこの海水さげらんやわの國家のさく  
 かさるのえあきまききみこそ云

所名

比叡へいひつ 若宮社わかにみやの七社の神輿こし遷神うつりかみの岸きし ▲来迎寺らいごうじ 惠心僧都ゑしんそうだう 森三九郎もりさんくわの墓はかあり  
 堂どうの極ごくを石いしに造るつく甚強しんじやう地ち之の寺てら宝たから右みぎ書かき ▲苗なへ席せき ▲雄おとこ琴こと里り 夜川よがわと云有いふて  
 堅かた四よ里り 大津おほつ村むら景けい昌しやうの地ち 大右おほみぎ柳やなぎ田での庄ぢやうといひ 此地このち伊豆いづの三さん勝かつの風景ふうけいは  
 似にうらとく山やま門かど法ほふ性じやう坊ぼふ修しゆ豆まめ權けん現げんを執と法ほふと  
 子こ名なが深ふか今いまもあき 神かみ池いけの浦うら 今いまもあき 鶴つるが池いけ今いまもあき  
 の古ふる名なに

所名

野の神かみ 此地このちは穴あなありてあきなり ○山やま洋やう瑞ずい寺じ 華はな嚴げん和わ尚しやう開かい基きして大おほ徳とく寺てら  
 満まん月げつ堂どう 一条いちじやう院いんの内うち惠ゑ心しん僧そう都だうの用もち基き 本もと是こゝ系けい師し如にょ來らい修しゆ教きやう大だい師しの作しやくなり  
 又また神かみ佛ぶつあり 又また弘こう明めい寺てらの燈とう籠かごあり  
 親おや音ね堂どう 本もと是こゝ系けい師し如にょ來らい修しゆ教きやう大だい師しの作しやくなり  
 夜よ川がわと天神てんじん 天あま文ふみ六む身み九く月げつ廿にふた日にち親おや書かき機きより勅とく法ほふして望もち田で一いつ郷きやうの氏うぢ神かみとせり  
 雲うみの勢せき望もち田での沖おほや附つるらんや、かげあきれらまのつり火ひ 定じやう交かう  
 盛せい衰すい記き 平へい大だい池いけ言ごん時じ忠ちゆう元げん遷せんのたれとて通とほるとそよや  
 真ま野の入いり江え 望もち田でと和わ奈なとの間まありが今いまの法ほふとててなり 其その神かみ川がわの神かみ池いけなり  
 和わ奈な 和わ奈なの御おん七しち村むら 南なん溪せき、中ちゆう溪せき、小せう溪せき、多た城じやう、中ちゆう村むら、小せう村むら 已い上じやう  
 比ひ良りやう山やま 日本にっぽん記き母ぼ明めい天てん望もち記きは平へい山やまと書かきるなりとていれちるなりとて八はち町ちやう斗と  
 ありとて樹じゆ木ぼくなるし本もと神かみ七しち寺てらの内うち雪ゆきの常じやう盤ばんあり  
 花はなささひらけ荒あらいやとむらんまの浦うら人ひとさるもつりなり  
 揚ようるらららら風かぜ吹ふきて花はなは紅こう紗しや志しのうらららら  
 九く近きん中ちゆう 良りやう徑けい

所名

比ひ良りやう山やま 魚いさな露ろ頂てい 佛ぶつ座ざ峯ほう 紫むらさき雲うみ山やま嶺りやう 法ほふ華わ灘なん 揚よう桃たう溪せき  
 栗くり原はら村むら 龍りゆう華わ寺てら 右みぎ扶たす桑そう名な勝かつ集じふふりあ  
 小こ松まつ 溪せき 寄よ原はら 里り 谷や 本もと是こゝ系けい師し如にょ來らい修しゆ教きやう大だい師しの作しやくなり

よき系々西い比良らのた根ね又また中ちゆう於お

こみとは小松こまつが谷やのまま門かど風かぜみみららりりてももたたいいままあありりほほく

揚梅やまへ瀧たき 小松こまつのの南みなみ乃のもも止と西にしの方かたたたりりあり

澄山すみやま石いし 五ご三さん坂さかかかどどここんんかかぶぶくく 小松こまつとと白しろ鷺さぎ明あき神かみのの海うみ辺へはは此こゝ同おな若わか松まつ凝こりりく

屏風びやうぶををままささるるかか如ごと下したをを経へ来きままそのその間ま六む町ちゆう斗と此こゝ造つくとと比ひ良ら石いし多たく

白しろ鷺さぎ明あき神かみ 比良ひらのの藤ふじ下したありあり比良ひら明あき神かみもも号なづく

志こころ曰いは永なが祿ろく又また年ねんのの早はやはは九月くわがつ十九じゅうきゅう日にち白しろ鷺さぎ大だい明あき神かみ社しゃのの海うみをを町ちゆう斗と石いしののをを再また見みぬぬるる也なり

神かみのの石いし佛ぶつありあり此こゝ内うち二十にじゅう体たいいい坂さかかかありあり明あき神かみよりより南みなみ志こころ賀が郡ぐん小こいいるる後のち郡ぐんあり

大溝おほいそ 城しろ郭かくありあり天あま正ただ年ねん中ちゆう織オリ田で七しち云い清きよ信のぶ澄すみ居い城しろとと其その後のち分ぶん部ぶ在あ系けい亮りやうのの城しろをを場ばままくく代よ居いせせららくくをを

伊勢いせ参まゐ宮みや花はな所ところ圖ず會かい卷まき附つけ録ろく終つひ

伊勢参宮花所圖會卷附録終

寛政九年丁巳五月

京都書林

菱屋孫兵衛

吉文字屋市左衛門

柏原屋與左衛門

柏原屋嘉兵衛

塩屋 平助

勝尾屋六兵衛

塩屋 忠兵衛

大坂書林

